

高等学校家庭科における生活主体を育成する授業の在り方

— 自己の生活と学習内容のつながりを考える評価活動を通して —

【研究者】 教科教育部 指導主事 小桝 由美

【研究指導者】 広島大学大学院教育学研究科 教授 鈴木 明子

【研究協力員】

広島県立三原東高等学校 教諭 緒方 陽子 広島県立尾道北高等学校 教諭 橋本 明子
広島県立祇園北高等学校 教諭 兼田 典子

研究の要約

本研究では、学習者の「リアルな課題」を生かした学習内容と自己の生活と学習内容のつながりを考える自己評価活動を組み入れた題材を設計し、その題材構成が生活主体の育成に及ぼす教育的効果を検証し、高等学校家庭科における授業の在り方に関する知見を得ることを目的とするものである。

文献研究から、生活者としての視点と生活実践力をもつ生活主体を育てるためには、生徒の身近な生活に引き寄せて考えられる「リアルな課題」を題材に組み入れること、学習者自身が学習の到達状況を確認するとともに、授業の中で自己の生活を振り返り、学校で学んだことが実生活で活用できることを実感する機会としての自己評価活動が必要であることをまとめた。この考え方にに基づき、3校の研究協力校において授業実践を行い、その効果を検証した。

授業実践から、次の結果が得られた。①題材前後の生活主体アンケートの肯定的評価の割合は、3校ともすべての項目において増加した。②生活主体アンケートの題材前後の有意差検定を男女別に行った結果、生活主体に必要な四つの要件について有意差が見られた。③振り返りシートの自由記述の内容は、目指す生活像を考えている記述や身近な生活から課題を見いだした記述、学習内容を自分に引き寄せ考えている様子が見られた。④異なる題材を展開したすべての授業者が「リアルな課題」と自己評価活動を組み入れた題材構成に意義を感じていたことから、他の内容についても同様の題材構成が有効であることが推察される。これらのことから学習者の「リアルな課題」を生かした学習内容と自己の生活のつながりを考える自己評価活動を組み入れた題材構成は、生活主体の育成に有効であることが分かった。

キーワード：生活主体 リアルな課題 自己評価活動

目次

はじめに	117
I 研究の目的、内容及び方法	118
II 研究の基本的な考え方	118
III 生活主体を育成する授業実践	122
IV 結果と考察	126
V 成果と課題	133
おわりに	134

はじめに

近年、国際的な調査や国内の全国調査を通して生徒にどのような力を付けるかについての論議が盛んである。これまでの「何をどれだけ知っているか」ではなく「知っていることを実生活のさまざまな場面で直面する課題にいかに関わり、その課題を解決できるか」という点が重視されている。また、授業

の在り方についても、知識を単に教え込むのではなく、子供にとって切実な課題を通じ、具体的な文脈の中で繰り返し使うことで力を育成しようとする流れがある。

家庭科は従来から、日常生活を扱う学習内容と問題解決的な学習を重視する学習方法をもっており、これからの時代に必要な力を育成する上で、その根幹となる内容と方法を備えている教科といえる。しかし、学習したことを実生活で活用する頻度は低く、生活に関わる行動の実践能力が十分備わっているとはいえない状況にある。高等学校家庭科では、自己の成長の展望をもち、家庭生活を基盤としながら学習内容相互の関連を理解し、生活を総合的に捉える生活主体の育成が求められている。高等学校は、その最後の機会となるにもかかわらず、広島県内の多くの学校が履修している「家庭基礎」は、標準単位

が2単位であり、70単位時間しか確保されていない。その少ない時間数の中であっても、生活者としての視点と生活実践力をもつ生活主体を育てていく必要がある。そのためには、生徒の身近な生活と関連させた題材を設計し、身に付けた知識や技術を活用し課題を解決していく授業展開の工夫が求められる。また、その学習を効果的に進めるためには、学習者自身が学習の到達状況を確認するとともに、授業の中で自己の生活を振り返り学校で学んだことが実生活で活用できることを実感する機会が必要である。

本研究では、このような考え方にに基づき、生活者としての視点と生活実践力をもつ生活主体を育成する授業の在り方を明らかにすることを目指していく。

I 研究の目的、内容及び方法

1 研究の目的

本研究では、学習者の「リアルな課題」を生かした学習内容とその学習内容と自己の生活とのつながりを考えることができるように自己評価活動を組み入れた題材を設計し、その題材構成が生活主体の育成に及ぼす教育的効果を検証し、高等学校家庭科における授業の在り方に関する知見を得ることを目的とする。

2 研究の内容及び方法

- 家庭科で育成する力に関する諸説を調査し、整理する。
- 家庭科における題材構成の工夫及び評価法に関する先行研究を調査し、整理する。
- 生活主体としての成長を見取るアンケート調査及び自己評価シートを作成する。
- 研究協力校において検証授業を行い、成果と課題を把握する。

3 研究計画

研究内容	期間
○ 研究計画書の作成	4月
○ 文献研究、評価シートの作成	4月～6月
○ 研究協力員会議	6月～12月
○ 検証授業	10月～12月
○ データの分析、検証、成果と課題の整理	12月～1月
○ 研究報告書の作成	1月～3月

II 研究の基本的な考え方

1 求められる学力と家庭科で育てる力

(1) これから求められる学力

OECDによる学習到達度調査（PISA）によって、国際的に求められる学力論が注目されるようになった。この調査では、これまでに身に付けてきた知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかをみることを目的としている。

また、平成19年度から始まった日本の全国学力・学習状況調査も、「実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能」（主として「知識」に関する問題）と「知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する能力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などに関わる内容」（主として「活用」に関する問題）とで構成されている。

さらに、平成24年12月に文部科学省に設置された育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会では、正答のない困難な問題の解決に必要な思考力等の資質・能力の育成が不可欠との意見が出されている。

以上のことを踏まえると、これからは「知識の量」ではなく「習得した知識や技能を活用し、実生活のさまざまな場面で直面する課題を解決する能力」が求められているといえる。

(2) 家庭科で育てる力

教科で育成したい能力の目標は、学習指導要領に示されている。高等学校における共通教科としての家庭科の目標は次のとおりである。

人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる。

共通教科「家庭」の目標

高等学校家庭科では、「主体的に生活を創造する能力」と「実践的な態度」を育てることが目標とされている。この「実践的な態度」とは、学習で得たものを実生活に活用する態度であり、生活の各場面で課題を見いだし、その解決を図りながら、家庭生活や地域の生活の充実向上を果たす態度である。

また、中間美砂子（2005）は、学習指導要領の目標及び生徒指導要録の評価の観点を踏まえて、家庭

科で育成する学力の構造を次のように図示している。

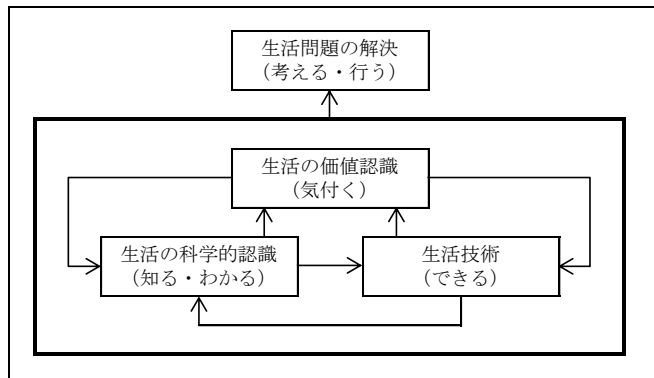


図1 家庭科で育成する学力の構造¹⁾

中間（2005）は、価値が認識されて、科学的認識・技術が習得される場合もあれば、その逆もあり、これらの力の間には、順序関係はなく相互関係があると説明し、「生活の科学的認識」「生活技術」「生活の価値認識」を「生活問題の解決」に向け活用する総合的学力こそ、家庭科で育成する学力であると述べている。

このように家庭科では、知識・技術の習得のみならず、意思決定や問題解決をも含めた能力の育成を目指しており、これからの時代に必要な既習の知識と技術を駆使し、実生活で直面する問題を総合的に把握し解決する力を付ける教科であるといえる。

2 家庭科で育てる生活主体とは

(1) 子供の実態と家庭科教育

日本家庭科教育学会は、2001年に全国規模の調査を行った。この調査から、子供たちは、多忙な生活の中、生活財や人との関わり方が表面的、消極的であり、様々な生活技能を習得する機会が少ない状況にあることが明らかになった。また、家庭生活や家族を大切に思う気持ちや生活に必要な知識や技能を習得しようという意識はもっているものの、生活技能が乏しいために、身近な環境との関わりをもって生活認識を広げ深めていくことができないという悪循環に陥っていることが示唆された。

また、中央教育審議会答申（平成20年）は、子供たちの自制心や規範意識の希薄化、生活習慣の確立が不十分であることが課題であるとし、自己肯定感が低く、人間関係の形成が困難かつ不得手になっていると指摘している。

島本美幸・鈴木明子（2006）は、広島県の高校生を対象とした生活的自立と関係的自立に関する実態調査を行った。そこでは、生活的自立については、

必要性を感じているものの実践率は低いこと、特に衣生活について、その傾向が顕著であることを明らかにした。また、関係的自立を築くことについても全体的に必要性を感じているものの、行動が伴っていないことを報告している。

このように、様々な調査から生活に関わる行動の実践能力や自分とそのまわりの家族、社会、環境との関係を築く能力が十分備わっているとはいえず、家庭科を通してその育成が望まれていることが明らかとなった。

(2) 生活主体とは

高等学校家庭科の目標には、「主体的に生活を創造する能力」を育成することが明記されており、学習者自身が生活者として、身近な環境と関わり、自分のもっている知識や技能を用いて、主体的によりよい生活を目指し実践する生活主体としての成長が求められているといえる。ここでは、家庭科で育てる生活主体について諸説を整理し、本研究における生活主体を定義する。

天野正子（1996）は、生活者を、「生活の全体性を把握する主体」「静的な形態ではなく『生活者』へと生き方をかえていく一つのダイナミックな日常の実践」²⁾としている。また、荒井紀子（2005）は、家庭科で育てる「生活主体者」を「『自分や家族の生活を自立的に営む』ことができ、『生活課題の改善や解決に主体的に取り組むとともに生活の主権者として課題の社会的な解決への自覚と実践力をもち』、かつ『平等を基本として、家族や他の人と共生・連帯する』ことができる生活者」³⁾と捉えている。さらに、福田公子（2008）は、生活者を「日常的な生活に価値を見だし、自分の人権を守り他人の人権を尊重し、社会や自然環境および未来について見通しをもって、よりよい人生を目指して生活実践している人」⁴⁾と定義している。三者とも、日常生活に対し主体的にはたらきかけることの重要性を述べている。

高校生の実態を踏まえると、生涯を見通し、自分がどう生きていくのかについて実感的に理解し、社会の変容に対応できる力を身に付けることも重要であるが、それ以前に、自分の生活をみつめ、身近な人やモノやコトと主体的に関わり、生活実践を重ねることが求められるのではないだろうか。それによって、はじめて自分の生活や生涯を実感的に捉え、それらに関わる学習の必要性に気付くことができると考える。

そこで、本研究で目指す生活主体を、「日常的な

自分の生活を大切に、自分とそのまわりの家族、社会、環境と関わりながら、もっている知識や技能を用いて、主体的によりよい生活を目指し実践する者」と定義し、その育成に必要な要件を次の四つに整理した。

- 日常生活を大切にする心情をもつこと
- 他者、身近な環境との関わり的重要性に気付くこと
- 生活に必要な基礎的・基本的な知識と技能を習得すること
- よりよい生活を目指して実践できること

生活主体の育成に必要な四つの要件

これらは、相互に関連しながら生活主体として成長することに影響を及ぼす。

3 生活主体を育成する授業について

(1) 家庭科における「リアルな課題」とは

近年、「リアルな課題」に取り組ませるプロセスの中で子供たちを評価する「真正の評価」が注目されている。田中耕治（2005）は、「リアルな課題」について「大人が仕事場や市民生活、個人的な生活の場で試されている、その文脈を模写すること」とウィギンズの論を紹介している。「リアルな課題」とは、学習者の生活文脈に即した場面設定を行い、その状況の中で、さまざまな知識や技能を総合して使いこなすことを求めるような課題といえる。

鶴田敦子（2012）は、家庭科における「リアルな課題」について、「真正の評価」論における「リアルさ」は実生活を映し出すという「親密さ」と同時に、それを解くために必要とされる総合的な深い理解力という「困難さ」（高次の思考）というアンビバレントな側面をもっているが、家庭科においては、「困難さ」ではなく、学習者自身にとっての意味に焦点を当てるという点に違いがあるのではないかと述べている。さらに吉原崇恵（2010）は、家庭科の学習課題には「解決したいという切実さ」、つまり、他人ごとではない課題を設定することが必要であると述べている。

自分自身の生活との接点を感じられる「リアルな課題」を授業で扱うことは、学習内容に「親密さ」を感じられるだけでなく、生活に生かせるという実用性によって学習意欲が高められると考える。

以上のことを踏まえ、本研究における「リアルな課題」とは、個々の学習者にとって他人ごとではないと感じられる、現在あるいは未来の実生活を反映した学習課題とする。

(2) 高等学校における家庭科授業の課題

日常生活を学習対象とする家庭科は、まさに学習者の実生活を映し出した「リアルな課題」を題材に盛り込むことが求められている教科といえる。しかし、島本（2006）は、広島県の高等学校家庭科カリキュラムの実態調査を行い、「最終的に生徒にどのような能力を身につけさせたいと考えているのか、生徒の生活実態や生活課題とどのような関連を図っているのか明瞭でない実践が見られた」という課題を報告している。

さらに、土屋善和（2014）は、高校生を対象としたアンケート調査の結果から、家庭科が「生活を創造する力」を指向しているにも関わらず、他教科の授業よりも家庭科の授業でその力が身に付くと思っていないことを明らかにし、高等学校段階での家庭科学習が知識・技術習得型の授業に偏っており、生徒が授業から得られた知識・技術を活用して思考し表現する場が授業の中に設定されていない可能性を指摘している。

このように、高等学校における家庭科は、個別の知識や技術を伝達することが重視されており、授業が学習者の生活をどのように把握し、学習者の生活と学習内容をどのように関連させ展開するかという視点をもって題材を構成している例が少ないことに課題があると考ええる。

今後は、学習者の実態を踏まえた「リアルな課題」の提示やそれを解決していく問題解決的な学習展開の工夫が求められる。問題解決的な学習の流れを仕組むことは、1単位時間だけではなく題材全体の学習展開の工夫として必要なことといえる。

(3) 「リアルな課題」を生かした題材構成

実生活を映し出す「リアルな課題」に取り組ませることによってこそ、子供たちの中に生きて働く学力が形成されるという考え方の背景には、構成主義的な学習観が存在する。この学習観は、知識は受動的に伝達されるものではなく、主体によって構成されると考えるものである。学習者は、教師に教わる前から何らかの知識や概念をもっているものである。授業で教師が提示した内容によって、その知識や概念を再構築していくのである。この構成主義的な学習観に立つと、自分の身近な日常生活やその中の「リアルな課題」を生徒がどのように受け止め家庭科学習と結んでいくかが、重要な課題であるといえる。

家庭科では、教科目標の実現に関わる学習内容を、学習者の身近な生活と関連させて指導しやすいまとまりである「題材」として指導している。学習者の

生活との関連を意識した題材構成の工夫としては、國本洋美（2004）の「けん's TOWN物語」がある。この授業は、コミュニティにおける架空の家族を設定し、その家族に起こった出来事を実践課題として解決をしていくという展開で進行する。架空の家族の課題を通して、自分の身の回りの「リアルな課題」を思い起こさせて学習内容と関連させるのである。

生活主体の育成に必要とされる日常生活を大切にする心情をもつためには、「リアルな課題」を題材に組み込んだ学習展開の中で、学習者が日常生活と学習内容のつながりを実感することが求められる。さらに、よりよい生活を目指して実践するためには、学習者が自己の生活と学習したことをつなぐ場面を設定し、様々なことができるようになっていく自分を実感することが必要である。そのためには、学んだ知識と技能を自らの生活に結び付けるといった場としての自己を振り返る機会をもつことが必要である。

本研究では、学習者が感じている「リアルな課題」を把握し、題材構成や授業展開に生かすことを目的に「リアルな課題」アンケートを行った。アンケートの概要を次に示す。

あなたの「リアルな課題」を教えて！

次の学習内容について、あなたの「生活密着度」と「知りたい度」を教えてください。

生活密着度	4	自分の生活とかなり関連がある	知りたい度	4	学習内容について詳しく知りたい
	3	自分の生活とやや関連がある		3	学習内容についてやや知りたい
	2	自分の生活とあまり関連がない		2	学習内容についてあまり知らなくてもよい
	1	自分の生活と全く関連がない		1	学習内容について知らなくてよい

当てはまるところに○印をしてください。

	学習内容	生活密着度				知りたい度			
1	乳幼児の心身の発達の特徴	4	3	2	1	4	3	2	1
2	乳幼児の遊び	4	3	2	1	4	3	2	1
		4	3	2	1	4	3	2	1

これから学習する内容（教科書 p.○～p.○）とあなたの生活の「リアルな課題」（過去の苦い経験、現在の困りごと、将来困りそうなこと）が結びついたことを書きましょう。

例）携帯電話に架空請求メールが頻りに来るので、困っている。

「リアルな課題」アンケートの概要

4 自己評価活動を取り入れた題材構成と評価方法

(1) 自己評価活動を取り入れた題材構成

「リアルな課題」を生かしていくためには、生徒が自ら自己を振り返る必要がある。ここでは、題材における自己評価活動の意義を明らかにしたい。

岸田蘭子（2011）は自己評価活動を学習の中に位置付けることの効果について、次の三つを挙げている。

- 学習のねらいを明確に示すことで、学習者自身が授業のねらいに到達できたが見えやすいこと
- 学習の成果を自分で見つめることで、学習意欲を喚起することができること
- 自己評価活動を繰り返して続けていくことで、自己評価力が身に付き、学習の方向を整理できるようになること

学習の中に自己評価活動を位置付けることの効果

また、その方法には、自己評価を3段階や5段階で評価させ、振り返りカードとして書かせる方法や、場面を想定して、自分なら学び取ったことをどのように伝えるか、といったパフォーマンスを評価する方法を提示している。

家庭科における自己評価に関する先行研究には、次のようなものがある。内藤利枝子・伊藤葉子（2006）は、家庭科における四つの自己評価モデルを開発し、主体的に学ぶための手立てとして有効な自己評価の共通要因として次の二つを挙げた。一つ目は、自分がこれから始める一連の授業が見通せるような仕組みを有していること、二つ目は各自の興味・関心や知識・技術のレベルに応じた目標設定ができるという個性と教師や友人との相互関係の中で学び合うという学びの共有性の双方が保障されていることである。また、岸田恵津・大瀬良知子・矢埜みどり・真鍋典子（2007）は、高等学校の栄養教育における実践の中で、授業ごとの振り返りに加えて、一定期間の学習をまとめて振り返る時間を確保することが、知識の整理や具体的な行動目標の設定に有効であり、より深い振り返りが可能になることを見いだした。このように先行研究では、家庭科における自己評価、継続的な評価の重要性が示されている。

これらのことから、題材に自己評価活動を組み込むことには、次のような意義があると考えられる。

- 自己の生活と学習内容のつながりを考える機会を継続的にもつことができる。
- 自己の成長を実感することで、学習意欲を喚起することができる。
- 学習内容の関連性を捉えて生活を総合的に捉えることができる。

題材に自己評価活動を取り入れることの意義

(2) 生活主体の育成をみる自己評価シートの作成

前項では、自己評価活動を題材に取り入れることの意義についてまとめた。次に、具体的な自己評価シートを検討するに当たり、自己の生活と学習内容

とのつながりを考えること、生活主体としての自分の成長を実感することを強調したいと考え、2種類の自己評価シートを作成した。

ア 生活主体アンケート

生活主体アンケートは生活主体としての自分の成長を題材前後の長いスパンで自己評価するものとして作成した。17項目からなり、それぞれの項目は生活主体に必要な要件と関連している。それぞれの項目に対し、「よく当てはまる」「大体あてはまる」「あまり当てはまらない」「全くあてはまらない」の4件法で回答を求めた。アンケート項目と生活主体に必要な四つの要件との関連を表1に示す。

表1 生活主体アンケートの項目と生活主体に必要な要件との関連

アンケート項目		生活主体に必要な四つの要件
1	家族などの「人」や衣服や食物などの「もの」「時間」「金銭」などに関心がある。	日常生活を大切にすることをもつこと
2	家庭生活は、「人」「もの」「時間」「金銭」などが互いに関連し合っていると思える。	
3	「人」「もの」「時間」「金銭」などが互いに関連し合っている生活の営みには意味や理由があると思える。	
4	様々な立場の人と意思疎通を図り交流することができる。	他者、身近な環境との関わり的重要性に気付くこと
5	家族を構成する一員として思いやりと役割を認識して行動できる。	
6	社会を構成する一員として責任ある行動ができる。	
7	生活環境の問題を把握するとともに望ましい環境を創造していくために環境への働きかけをすることができる。	生活に必要な基礎的・基本的な知識と技能を習得すること
8	家庭科で学んだ知識を身に付けている。	
9	家庭科で学んだ知識を実際の生活に生かしている。	
10	家庭科で学んだ技術を身に付けている。	よりよい生活を目指して実践すること
11	家庭科で学んだ技術を実際の生活に生かしている。	
12	生活を創意工夫することを通して楽しさを味わったり生活のスタイルを創造したりしていきたい。	
13	目指す生活像を実現していく方法を考えていきたい。	
14	生活をよりよく営んでいきたい。	
15	生涯を見通して生活を設計していきたい。	
16	自己の生活の中から課題を見いだしている。	
17	家庭科の学習を実際の生活と結び付けて考えることができる。	

イ 振り返りシート「今日の授業の記録」

振り返りシート「今日の授業の記録」は、短いスパンで継続的に自己を振り返り、自己の生活と学習内容とのつながりを考えさせる機会をもつことを目的に作成した。このシートは、教師が示した目標に対する到達の程度を4段階で回答する項目と自己の生活と学習内容とのつながりを自由記述で求める項目から構成されている。2時間連続で家庭科の授業が組まれている場合は、2時間目の授業の終わりに実施した。題材を通して、同じシートを用いることで一連の授業が見通せるような仕組みをもたせている。振り返りシートの一部を次に示す。

今日の授業の記録

日付	授業の内容	自分の身近な生活と今日の授業で学習したことが結びついたことは何ですか	各目標の達成度 (自己評価)
／			① 4 3 2 1 ② 4 3 2 1
			

() 年 () 組 () 番 ()

図2 振り返りシート「今日の授業の記録」(一部)

2種類の自己評価シート「生活主体アンケート」、振り返りシート「今日の授業の記録」及び前節で示した「リアルな課題」アンケートの実施時期を図3に示す。

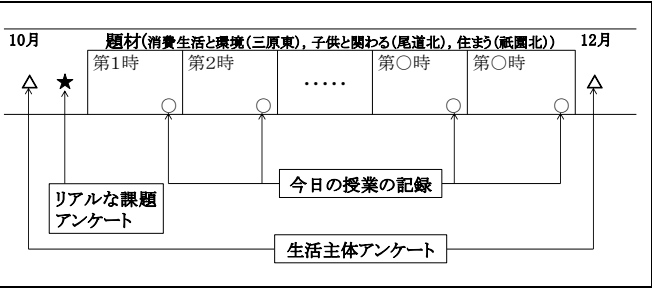


図3 アンケート等の実施時期

Ⅲ 生活主体を育成する授業実践

本章では、3校の研究協力校の授業者が、自校の学習者の「リアルな課題」をどのように解釈し、題材構成や指導にどのように生かしたかについて述べたい。

1 三原東高等学校の実践

(1) 学習者の「リアルな課題」と指導の工夫

三原東高等学校の学習者の「リアルな課題」をまとめたものを表2に示す。

表2 学習者の「リアルな課題」(三原東高等学校)

n=136

「リアルな課題」 (件)	主な記述内容
インターネットショッピング、通信販売 (27)	・インターネットで靴を買ったが、自分の頼んだ足の大きさと違う大きさのものが届いてしまった。面倒なのでそのまま保管している。 ・ネットでは買い物をしている感覚がないので、お金を使いすぎてしまいそうだ。 ・インターネットで中古の商品を買ったら不良品で動かなかった。仕方ないので放置している。 ・インターネットで注文した財布が1ヶ月たった今でも届かない。 ・ネットで服を買ったけどサイズが大きくてそのままにしている。
特殊詐欺、悪質商法 (21)	・親類関係が詐欺に騙されないか心配だ。 ・母の家のおばあちゃんが訪問詐欺にあったり、あいそうになったりしたことがある。 ・あるおばあさんの家に、この置物があると幸運が訪れると言われ、買わされた。 ・パソコンでワンクリック詐欺にあつてずっとメールが届くが無視している。
計画性のなさ (10)	・あるときお小遣いとして1万円もらった。計画的に使おうと思ったがすぐ使ってしまった。 ・本の買いすぎで金欠だ。 ・これから自分がお金を持つと使いすぎてお金がすぐなくなってしまう。 ・お小遣いを使いすぎてしまう。
一人暮らしの家計管理 (4)	・一人暮らしをしたら貯金をあまりしてなさそうな気がする。 ・将来の一人暮らしでだいたいどのくらいかかるのか知りたい。

(その他の回答、無回答があるため合計が136と一致しない。)

件数の多い順にみると、「インターネットショッピング、通信販売」(27件)、「特殊詐欺、悪質商法」(21件)であった。特に、「インターネットショッピング、通信販売」に関する記述内容をみると、「面倒なのでそのまま保管している。」「仕方ないので放置している。」などトラブルにあっているのに、それを解決しようとしていない姿が見られた。そこで指導者は、トラブルにあった時の対処方法を知らせるために、悪質商法の事例検討を取り入れたり、地域の消費生活センターの場所や利用方法を説明したりした。

また、この指導者は無回答が43.4%見られたことから、自分の生活の課題を見いだせないという学習者の課題を感じたという。そこで、授業で扱う資料に学校に送られてきた求人票を用いたり、修学旅行

での買い物を考えさせたりすることで自己の生活と学習内容のつながりを考えさせ、課題意識をもたせようとした。これらのことを踏まえて、次の題材構成や指導の工夫を行った。

- 消費者トラブルを解決しようとする学習者の課題を受け、悪質商法の事例検討やクーリング・オフの書き方を指導した。
- 登場人物を設定することや身近な話題を授業で扱うことで、学習内容と自己の生活のつながりを感じさせる工夫を行った。

三原東高等学校における題材構成や指導の工夫

(2) 題材の指導計画

- 題 材 名 「消費生活と環境」
- 対 象 第1学年 147人
- 実施期間 平成26年10月～12月
- 題材の目標

家庭の経済の現状、社会の変化に伴う消費構造の変化や消費行動の多様化などの現状や課題、消費者の権利や責任、消費生活と環境の関わりについて理解し、消費者としての適切な意思決定に基づいて責任をもって行動できるようにする。

○ 題材の評価規準

関心・意欲・態度	家庭の経済と消費、消費行動と環境などに関心をもち、意欲をもって学習活動に取り組んでいる。
思考・判断・表現	家庭の経済生活、消費者の権利と責任、消費生活と環境の関わりについて、課題を見付け、その解決を目指して思考を深めている。
技能	自立した消費者としての家庭経済の管理や計画に関する技術を身に付けている。
知識・理解	家庭の経済と消費、消費行動と環境について理解し、消費者として責任をもって行動するために必要な基礎的・基本的な知識を身に付けている。

○ 指導と評価の計画(全8時間)

時	学習内容	関	思	技	知
1 2 3	家計の計画と管理 ・家計における収支について理解し、生涯を見通した家庭の経済計画について考える。 ・家庭経済と国民経済との関わりについて理解する。		○		○
4 5	消費者の権利と責任 ・消費生活の現状と課題を知り、課題の解決方法を考える。		○		○
6 7	消費者をめぐる問題 ・消費者をめぐる様々な問題について考える。	○		○	

8	これからの消費生活と環境 ・持続可能な社会をめざし、環境 負荷の少ない生活について考 える。	○	○		
---	---	---	---	--	--

2 尾道北高等学校の実践

(1) 学習者の「リアルな課題」と指導の工夫

尾道北高等学校の学習者の「リアルな課題」をまとめたものを表3に示す。

表3 学習者の「リアルな課題」（尾道北高等学校）

n=190

「リアルな課題」 (件)	主な記述内容
子供との 関わり方 (27)	・子供と話していると相手が何を考えているか全然分からない。 ・子供の関心があるものがよく分からない。 ・身近に小さな子供がいないので、いまひとつ接し方がよく分からない。 ・親戚に4歳と2歳と0歳の子供がいるが、それぞれ遊び方が違うので、年代に合った遊びが知りたい。
子供の しつけ (26)	・今まではほとんど興味がなかったけど、虐待のことなどニュースでもよく聞くのでいろいろと知っておきたい。 ・子供がやってはいけないことをした時の親の態度が知りたい。 ・小さな子供が二人以上いる時、どちらの言い分を優先すればいいか分からない（遊び相手など）。 ・親になったとして、叱り方などが分からない。 ・悪いことを教えても繰り返してしまう時の注意の方法が知りたい。 ・子供を将来もった時に、イライラしたら手を出してしまいそうで怖い。
子供が 苦手 (12)	・子供をもちたいと思っているが、3歳くらいの子供が大嫌いだ。 ・子供が苦手で上手にコミュニケーションができない。いつもなめられているので、子供と接するのがあまり好きではなくなってしまった。でも、小さい子はとてもかわいいと思う。 ・小さい子供が苦手で少し困っている。 ・寝ているだけの赤ちゃんがきらい（苦手）なので、将来子供をもちたくない。
親になる ことへの 不安 (8)	・将来親になっていいのか分からない。 ・自分がいとこなどの中でも末っ子なので子供と接する機会がなく子育てができるか不安だ。 ・子供ができたなら、どうしていいか全く分からない。育てられる自信がない。 ・小さい子があまり得意ではないので子供は欲しいが親の時不安。
社 会 制 度・社会	・自分の周りの公園がどんどん遊具が撤去され遊びにくくなっている反面、そこで老人

環境 (7)	・がゲートボールをしているのを見かけるがなぜそのような状況になってしまったのか調べたい。 ・子供が生まれた時、親になった時、行政や医療保険などに対してどのような手続きが必要か、それはどうすればいいのかを知りたい。 ・将来、恵まれない子供たちの里親になりたいと思っているので、その制度を知りたい。
将来との つながり (6)	・将来は助産師になりたいと思っている。出産後の子育てサポートもしなければならぬので、ある程度のことを知っておきたい。 ・将来、幼稚園の先生になりたいと思っているので、子供についての知識を身に付けておきたい。 ・将来保育士になりたいと思っているが、知識が全くない。親と子の問題について知りたい。

(その他の回答、無回答があるため合計が190と一致しない。)

尾道北高等学校の学習者の「リアルな課題」を件数の多い順にみると、「子供との関わり方」(27件)、「子供のしつけ」(26件)、「子供が苦手」(11件)であった。これは、普段、乳幼児と関わる機会がほとんどないため、子供の実態が分からないことに起因するものと思われる。さらに、実態が分からない不安が、「親になることへの不安」(8件)につながっていると思われる。

このことから、授業の中で、子供と触れ合う学習活動を取り入れるなど、子供と直接関わることを通した実感を伴う理解を深める学習が求められると言える。そこで、授業者は「妊婦体験モデル」を装着させたり、「赤ちゃん人形」の世話をさせたりする学習活動を取り入れた。

また、将来子供と関わる仕事に就きたいと考えている学習者にとっては、子供の成長や親と子の問題、社会制度等の知識を身に付けたいという意欲が見られた。これらのことを踏まえて、次の題材構成や指導の工夫を行った。

- 「妊婦体験」や「育児体験」などの活動を取り入れ、実感を伴う理解を深める授業を展開した。
- 現実には起りうる場面を設定し、そこから課題を見だし、解決していく学習活動を展開した。
- 新聞記事を用いて、実際に起こっている出来事を提示し、将来の保育環境や育児について考えさせた。
- 学習内容を自分と関連付けさせるため、「地域の人として」「親として」「保育者として」という視点を与えた。

尾道北高等学校における題材構成や指導の工夫

(2) 題材の指導計画

- 題 材 名 「子供と関わる」
- 対 象 第1学年 201人
- 実施期間 平成26年10月～12月
- 題材の目標

乳幼児の発達と生活、親の役割、子供の育つ環境について理解させ、子供を産み育てることの意義や保育者や地域社会の役割について考えさせるとともに、意欲的に子供に関わっていこうとする態度を育てる。

○ 題材の評価規準

関心・意欲・態度	子供の発達と保育について関心を持ち、実践的・体験的な活動を通して主体的に学習活動に取り組んでいる。
思考・判断・表現	子供の発達と保育について、現代の家庭や地域の生活を見つめて課題を見だし、その解決を目指して思考を深め、適切に判断し表現している。
技能	子供と適切に関わることができたり、子供の健やかな発達を支援したりするために必要な技術を身に付けている。
知識・理解	子供の発達と保育について理解し、家族及び地域や社会の果たす役割を認識するために必要な知識を身に付けている。

○ 指導と評価の計画（全11時間）

時	学習内容	関	思	技	知
1 2	青年期の健康と生命の芽生え ・生命の芽生えと出産について知り、生命に対する責任を考える。 ・妊婦体験モデルを装着し、様々な日常動作を体験する。	○			○
3 4	発達のすばらしさ ・乳幼児の月齢・年齢に伴う心身の発達について理解する。 ・赤ちゃん人形を用いて抱き方やおむつ交換を体験する。	○			○
5 6	子供の生活 ・子供の成長と生活、健康管理と安全について理解する。 ・子供の基本的生活習慣・社会的生活習慣について理解を深める。				○
7	親になること ・子供を生み育てる意味を考え、子育てしやすい環境とはどのようなものか考える。		○		
8 9 10	子供と遊び ・子供にとっての遊びの意義について理解を進める。 ・グループでの絵本の読み聞かせ活動を行う。	○		○	○
11	すこやかに育つ環境 ・子供の福祉について理解し、社会全体で子育てすることについて考える。		○		○

3 祇園北高等学校の実践

(1) 学習者の「リアルな課題」と指導の工夫

祇園北高等学校の学習者の「リアルな課題」をまとめたものを表4に示す。

表4 学習者の「リアルな課題」（祇園北高等学校）

n=114

「リアルな課題」 (件)	主な記述内容
防災・安全 (17)	・防火や防犯について知りたい。 ・大地震や異常気象への備えについて知りたい。 ・災害が起きた時のために何を優先して用意すればよいか知りたい。 ・一人暮らしをした時に、防火などの対策をどうすればよいか知りたい。
快適な室内環境 (16)	・部屋に日が当たらずなんとなく湿っている。どのような工夫をしたら、風通しが良くなるのか知りたい。 ・勉強しやすい部屋について知りたい。 ・騒音対策（防音）について知りたい。 ・室内環境について知りたい。 ・快適な部屋がどのようなものか知りたい。
一人暮らしの部屋選び (14)	・どういう部屋がいいか（広さ、機能、立地）知りたい。 ・他県での生活について知りたい。 ・一人暮らしをする時にどんな準備をしておけばよいか知りたい。 ・一人暮らしをする際はどんな部屋を選べばよいか知りたい。
環境への配慮 (3)	・エコで快適な生活について知りたい。 ・地球環境に配慮した住居は何かあるのか分からない。 ・住んでいる人、地域の人、環境にいい家とは何か知りたい。
地域との関わり (2)	・引っ越したため、地域とどのように関わればよいか分からない。
インテリア (2)	・部屋が広く見える家具の配置について知りたい。 ・インテリアの配置や部屋の装飾などについて知りたい。
その他 (13)	・高齢者になった時は今の家をリフォームした方がいいのかどうか分からない。 ・地価の変動のしくみについて知りたい。 ・駅から近い家の家賃が高い理由が分からない。 ・建築に興味がある。進路決定に役立てたい。

（その他の回答、無回答があるため合計が114と一致しない。）

祇園北高等学校の学習者の「リアルな課題」を件数の多い順にみると、「防災・安全」（17件）、「快適な室内環境」（16件）、「一人暮らしの部屋選び」（11件）であった。昨夏土砂災害の被害を受けた地

域に学校があるため、例年より「防災・安全」に対する課題意識が高い傾向が見られたと授業者は分析している。そこで、「災害への備え」をチェックリストで示したり、自分自身の家庭の避難場所を確認させたりする学習内容を設けた。これらのことを踏まえて、次の題材構成や指導の工夫を行った。

- 高校生の登場人物を設定し、その人物とともに課題を解決していく学習展開とした。
- この題材で学習した知識や技能を題材末のシミュレーション学習「住まい探しをしてみよう」で活用するストーリー性のある学習展開とした。
- 「住まいの安全」に関する内容について、チェックリストで点検したり、避難場所を確認させたりすることで、自分の生活とのつながりを意識させた。

祇園北高等学校における題材構成や指導の工夫

(2) 題材の指導計画

- 題 材 名 「住もうー住生活の自立と健康・安全ー」
- 対 象 第1学年 238人
- 実施期間 平成26年11月～12月
- 題材の目標

住居の機能や快適な室内環境について理解し、安全で快適な住生活を営むことができる。将来の一人暮らしをイメージし、自分のライフスタイルに合った住まいの条件について考え、住まい探しをすることができる。

- 題材の評価規準

関心・意欲・態度	住居と地域社会との関わりについて関心をもち、意欲的に取り組むことができる。
思考・判断・表現	自分のライフスタイルにあった住まいの条件について考えることができる。
技能	安全で快適な住生活を営むことができる。
知識・理解	住居の機能や快適な室内環境について理解することができる。

- 指導と評価の計画（全6時間）

時	学習内容	関	思	技	知
1	私たちの暮らしと住まい ・人にとってなぜ住まいが必要なのか考え、住まいの機能について理解する。	○			○
2 3	快適な住まいを目指して ・安全で快適な住生活を営むことのできる住まいの条件を知り、地震や災害に強く、日当たりや風通しのよい住まいについて考える。		○		○

4	部屋探しの基礎知識 ・DVD「見つけよう！マイルーム」を視聴し、賃貸住宅を借りる時のポイントについて理解する。				○
5 6	住まい探しをしてみよう ・将来の一人暮らしをイメージし、自分のライフスタイルに合った住まいを探すことができる。		○	○	

IV 結果と考察

1 題材前後の自己評価活動にみる効果

学習者が生活主体として成長したかを検証するため、題材前後の長いスパンで自己の振り返りをした生活主体アンケートの分析を行った。分析対象としたのは、題材前、題材後の両方に回答し、欠損値のないものである。分析対象数を表5に示す。

表5 生活主体アンケートの分析対象数

	男子	女子	合計
三原東高等学校	47	38	85
尾道北高等学校	79	85	164
祇園北高等学校	103	83	186
合 計	229	206	435

(1) 生活主体アンケートの肯定的評価の変化

生活主体アンケートに「よく当てはまる」「やや当てはまる」と肯定的に答えた数をみると、3校ともすべての項目において増加していた。増加数の多い上位3位をまとめたものが、表6から表8である。

表6 肯定的評価の増加数（三原東高等学校）

項目	増加数	n=85 (%)
7 生活環境の問題を把握するとともに、望ましい環境を創造していくために環境への働きかけをすることができる。	19	(22.4)
9 家庭科で学んだ知識を実際の生活に生かしている。	18	(21.2)
11 家庭科で学んだ技術を実際の生活に生かしている。	18	(21.2)
16 自己の生活の中から課題を見いだしている。	18	(21.2)
17 家庭科の学習を実際の生活と結び付けて考えることができる。	18	(21.2)

表7 肯定的評価の増加数（尾道北高等学校）

項目	増加数	n=164 (%)
7 生活環境の問題を把握するとともに、望ましい環境を創造していくために環境への働きかけをすることができる。	38	(23.2)
17 家庭科の学習を実際の生活と結び付けて考えることができる。	35	(21.3)
8 家庭科で学んだ知識を身に付けている。	32	(19.5)

表 8 肯定的評価の増加数（祇園北高等学校）

		n=186	
項目	増加数	（%）	
12 生活を創意工夫することを通して、楽しさを味わったり、生活のスタイルを創造したりしていきたい。	30	(16.1)	
9 家庭科で学んだ知識を実際の生活に生かしている。	28	(15.1)	
11 家庭科で学んだ技術を実際の生活に生かしている。	26	(14.0)	
16 自己の生活の中から課題を見いだしている。	26	(14.0)	

三原東高等学校、尾道北高等学校の第1位の項目は、「生活環境の問題を把握するとともに、望ましい環境を創造していくために環境への働きかけをすることができる」であった。これは、これまで考える機会の少なかった子育てしやすい社会環境について考えさせたり、環境負荷の少ない生活について考えさせたりしたことが影響していると思われる。

祇園北高等学校では、住まいに関する基礎的な知識を習得したのち、自分のライフスタイルに合った住まい探しのシミュレーションを行った。この活動により「生活を創意工夫することを通して、楽しさを味わったり、生活のスタイルを創造したりしていきたい」という項目に肯定的に評価する者が増加したのではないかと考えられる。

上位3位にあがった項目と生活主体に必要な要件との関連をみると、「生活に必要な基礎的・基本的な知識と技能を習得すること」に関する項目4項目のうち3項目が該当した。保育人形で育児体験をしたり、クーリング・オフの手続きを実際に体験したりすることで、知識や技能を習得したと実感できたのではないかと考えられる。

(2) 生活主体アンケートの男女差

生活主体アンケートに「よく当てはまる」「やや当てはまる」と肯定的に答えた肯定率の変化を検討した。尾道北高等学校、祇園北高等学校の題材後の肯定率は、すべての項目において、女子が男子を上回っていた。三原東高等学校では、17項目中10項目において、女子が高い数値を示していた。さらに、この結果が有意な差であるかを検討するため、マンホイットニーのU検定を行った。各学校の題材前あるいは題材後において有意差が見られた項目を表9から表11に示す。

題材後の肯定率は、三原東高等学校1項目、尾道北高等学校3項目、祇園北高等学校4項目について女子が有意に高いことが分かった。このことから、生活主体としての意識は男子に比べ、女子の方が高い傾向にあるといえる。

表 9 生活主体アンケートの男女差（三原東高等学校）

		n=85					
		題材前肯定率		有意差	題材後肯定率		有意差
		男子	女子		男子	女子	
17	家庭科の学習を実際の生活と結び付けて考えることができる。	57.4	78.9		85.1	88.2	*
							<i>*p<.05, **p<.01</i>

* $p < .05$, ** $p < .01$

表10 生活主体アンケートの男女差（尾道北高等学校）

n=164						
	題材前肯定率		有意差	題材後肯定率		有意差
	男子	女子		男子	女子	
2	家庭生活は、「人」「もの」「時間」「金銭」などが互いに関連し合って、営まれていると思う。					*
5	家族を構成する一員として、思いやりと役割を認識して行動できる。					*
10	家庭科で学んだ技術を身に付けている。					
12	生活を創意工夫することを通して、楽しさを味わったり、生活のスタイルを創造したりしていきたい。					**
13	目指す生活像を実現していく方法を考えていきたい。					

$*p< .05, **p< .01$

* $p < .05$, ** $p < .01$

表11 生活主体アンケートの男女差（祇園北高等学校）

n=186						
	題材前肯定率		有意差	題材後肯定率		有意差
	男子	女子		男子	女子	
2	家庭生活は、「人」「もの」「時間」「金銭」などが互いに関連し合って、営まれていると思う。					
	94.2	98.8		96.1	97.6	
8	家庭科で学んだ知識を身に付けている。					
	76.7	95.2	**	82.5	92.9	**
9	家庭科で学んだ知識を実際の生活に生かしている。					
	46.6	82.1	**	68.9	88.1	**
11	家庭科で学んだ技術を実際の生活に生かしている。					
	43.7	83.3	**	66.0	86.9	**
12	生活を創意工夫することを通して、楽しさを味わったり、生活のスタイルを創造したりしていきたい。					
	68.9	85.7	**	87.4	98.8	*
15	生涯を見通して生活を設計していきたい。					
	83.5	85.7	*	89.3	100.0	
$*p<.05, **p<.01$						

* $p < .05$, ** $p < .01$

(3) 生活主体アンケートの題材前後の差

次に、生活主体としての成長を長いスパンで検証するため、題材前後の差について、ウィルコクソンの順位と検定を行い、検討した。各校の生活主体アンケートの肯定率及び有意差検定の結果を表12から表14に示す。

三原東高等学校の男子の題材前の肯定率は、「16 自己の生活の中から課題を見いだしている」「11 家庭科で学んだ技術を実際の生活に生かしている」「17 家庭科の学習を実際の生活と結び付けて考えることができる」の3項目において50%台と低い値を示していた。しかし、題材後は3項目ともに肯定率は向上し、有意差が見られた。女子についても、肯定率が70%を下回っていた「7 生活環境の問題を把握す

表12 生活主体アンケートの題材前後の差（三原東高等学校）

項目		n=47			n=38		
		肯定率(男子) 題材前	肯定率(男子) 題材後	有意差	肯定率(女子) 題材前	肯定率(女子) 題材後	有意差
日常生活を大切に する心情をもつこと	1 家族などの「人」や衣服や食物などの「もの」「時間」「金銭」などに関心がある。	70.2	87.2	*	78.9	87.1	*
	2 家庭生活は、「人」「もの」「時間」「金銭」などが互いに関連し合って、営まれていると思う。	93.6	97.9		92.1	97.6	
	3 「人」「もの」「時間」「金銭」などが互いに関連し合っている生活の営みには意味や理由があると思う。	89.4	95.7		92.1	95.3	*
他者、身近な環境と のかかわりの重要性 に気付くこと	4 様々な立場の人と意思疎通を図り、交流することができる。	74.5	80.9		63.2	82.4	*
	5 家族を構成する一員として、思いやりと役割を認識して行動できる。	80.9	91.5		84.2	90.6	
	6 社会を構成する一員として、責任ある行動ができる。	76.6	85.1		84.2	89.4	*
	7 生活環境の問題を把握するとともに、望ましい環境を創造していくために環境への働きかけをすることができる。	68.1	93.6	**	60.5	87.1	*
生活に必要な基礎 的・基本的な知識と 技能を習得すること	8 家庭科で学んだ知識を身に付けている。	80.9	89.4		89.5	89.4	
	9 家庭科で学んだ知識を実際の生活に生かしている。	63.8	83.0	**	68.4	87.1	*
	10 家庭科で学んだ技術を身に付けている。	76.6	80.9		86.8	87.1	
	11 家庭科で学んだ技術を実際の生活に生かしている。	53.2	76.6	**	73.7	83.5	*
よりよい生活を目指 して実践できること	12 生活を創意工夫することを通して、楽しさを味わったり、生活のスタイルを創造したりしていきたい。	80.9	80.9		86.8	85.9	
	13 目指す生活像を実現していく方法を考えていきたい。	78.7	87.2		84.2	89.4	
	14 生活をよりよく営んでいきたい。	95.7	97.9		89.5	96.5	
	15 生涯を見通して生活を設計していきたい。	78.7	95.7	**	81.6	94.1	
	16 自己の生活の中から課題を見いだしている。	51.1	74.5	**	65.8	78.8	*
	17 家庭科の学習を実際の生活と結び付けて考えることができる。	57.4	85.1	*	78.9	88.2	**

* $p < .05$, ** $p < .01$

表13 生活主体アンケートの題材前後の差（尾道北高等学校）

項目		n=79			n=85		
		肯定率(男子) 題材前	肯定率(男子) 題材後	有意差	肯定率(女子) 題材前	肯定率(女子) 題材後	有意差
日常生活を大切に する心情をもつこと	1 家族などの「人」や衣服や食物などの「もの」「時間」「金銭」などに関心がある。	78.5	88.6		80.0	95.3	
	2 家庭生活は、「人」「もの」「時間」「金銭」などが互いに関連し合って、営まれていると思う。	94.9	98.7		100.0	100.0	
	3 「人」「もの」「時間」「金銭」などが互いに関連し合っている生活の営みには意味や理由があると思う。	84.8	98.7	**	94.1	100.0	**
他者、身近な環境と のかかわりの重要性 に気付くこと	4 様々な立場の人と意思疎通を図り、交流することができる。	73.4	84.8	*	80.0	84.7	*
	5 家族を構成する一員として、思いやりと役割を認識して行動できる。	82.3	89.9	**	87.1	96.5	**
	6 社会を構成する一員として、責任ある行動ができる。	75.9	86.1	**	82.4	92.9	**
	7 生活環境の問題を把握するとともに、望ましい環境を創造していくために環境への働きかけをすることができる。	60.8	78.5	**	57.6	85.9	**
生活に必要な基礎 的・基本的な知識と 技能を習得すること	8 家庭科で学んだ知識を身に付けている。	69.6	91.1	**	75.3	92.9	**
	9 家庭科で学んだ知識を実際の生活に生かしている。	50.6	65.8	*	60.0	71.8	*
	10 家庭科で学んだ技術を身に付けている。	64.6	82.3	**	75.3	85.9	**
	11 家庭科で学んだ技術を実際の生活に生かしている。	53.2	63.3	*	62.4	71.8	*
よりよい生活を目指 して実践できること	12 生活を創意工夫することを通して、楽しさを味わったり、生活のスタイルを創造したりしていきたい。	77.2	89.9	*	85.9	98.8	*
	13 目指す生活像を実現していく方法を考えていきたい。	78.5	93.7	**	89.4	94.1	**
	14 生活をよりよく営んでいきたい。	100.0	98.7	*	98.8	100.0	*
	15 生涯を見通して生活を設計していきたい。	84.8	91.1	*	87.1	96.5	*
	16 自己の生活の中から課題を見いだしている。	67.1	74.7		64.7	75.3	
	17 家庭科の学習を実際の生活と結び付けて考えることができる。	67.1	89.9	**	72.9	92.9	**

* $p < .05$, ** $p < .01$

表14 生活主体アンケートの題材前後の差（祇園北高等学校）

項目		n=103			n=83		
		肯定率(男子) 題材前	肯定率(男子) 題材後	有意差	肯定率(女子) 題材前	肯定率(女子) 題材後	有意差
日常生活を大切に する心情をもつこと	1 家族などの「人」や衣服や食物などの「もの」「時間」「金銭」などに関心がある。	76.7	92.2	**	85.7	96.4	**
	2 家庭生活は、「人」「もの」「時間」「金銭」などが互いに関連し合って、営まれていると思う。	94.2	96.1		98.8	97.6	
	3 「人」「もの」「時間」「金銭」などが互いに関連し合っている生活の営みには意味や理由があると思う。	87.4	96.1	**	92.9	97.6	**
他者、身近な環境と のかかわりの重要性 に気付くこと	4 様々な立場の人と意思疎通を図り、交流することができる。	75.7	87.4	*	83.3	88.1	*
	5 家族を構成する一員として、思いやりと役割を認識して行動できる。	84.5	86.4	*	85.7	89.3	
	6 社会を構成する一員として、責任ある行動ができる。	79.6	89.3	*	88.1	91.7	
	7 生活環境の問題を把握するとともに、望ましい環境を創造していくために環境への働きかけをすることができる。	65.0	80.6	**	82.1	90.5	*
生活に必要な基礎 的・基本的な知識と 技能を習得すること	8 家庭科で学んだ知識を身に付けている。	76.7	82.5		95.2	92.9	
	9 家庭科で学んだ知識を実際の生活に生かしている。	46.6	68.9	**	82.1	88.1	
	10 家庭科で学んだ技術を身に付けている。	76.7	82.5		90.5	91.7	*
	11 家庭科で学んだ技術を実際の生活に生かしている。	43.7	66.0	**	83.3	86.9	
よりよい生活を目指 して実践できること	12 生活を創意工夫することを通して、楽しさを味わったり、生活のスタイルを創造したりしていきたい。	68.9	87.4	**	85.7	98.8	**
	13 目指す生活像を実現していく方法を考えていきたい。	82.5	93.2	**	84.5	96.4	**
	14 生活をよりよく営んでいきたい。	98.1	98.1		97.6	100.0	
	15 生涯を見通して生活を設計していきたい。	83.5	89.3	**	85.7	100.0	
	16 自己の生活の中から課題を見いだしている。	58.3	74.8	**	66.7	77.4	
	17 家庭科の学習を実際の生活と結び付けて考えることができる。	68.0	85.4	**	83.3	91.7	**

* $p < .05$, ** $p < .01$

るとともに、望ましい環境を創造していくために環境への働きかけをすることができる」「4 様々な立場の人と意思疎通を図り、交流することができる」

「16 自己の生活の中から課題を見いだしている」の3 項目すべてについて、肯定率が向上し、有意差が見られた。また、男女ともに「7 生活環境の問題を把握するとともに、望ましい環境を創造していくために環境への働きかけをすることができる」については、肯定率が25ポイント以上向上し、有意差も見られた。これは、自分の生活を振り返り環境負荷の少ない生活を営むためにできることを具体的に考えさせたことが影響していると思われる。

尾道北高等学校の男子については、「9 家庭科で学んだ知識を実際の生活に生かしている」「11 家庭科で学んだ技術を実際の生活に生かしている」の2 項目の題材前の肯定率が共に50%台と低い数値を示していた。題材後は、それぞれ65.8%、63.3%と向上し、有意差も認められた。女子は、「7 生活環境の問題を把握するとともに、望ましい環境を創造していくために環境への働きかけをすることができる」「9 家庭科で学んだ知識を実際の生活に生かしている」「11 家庭科で学んだ技術を実際の生活に生かしている」の3 項目の題材前の肯定率が低かった。題材後には、項目7は85.9%と向上し、有意差も認められた。項目9,11については共に向上したものの、肯定率は7割程度にとどまった。これは、題材「子供と関わる」で扱った知識や技術が現在の自己の生活で活用できるものではなく、将来、活用できるものという意識があったためと考える。また、男女とも生活主体として必要な要件である「他者、身近な環境との関わり的重要性に気付くこと」に関する4 項目中3 項目に1%水準の有意差が認められた。これは、「将来の親として」「地域の一員として」という視点をもたせて指導したことが、学習者の「家族を構成する一員」「社会を構成する一員」としての自覚を高めたものと考えられる。

祇園北高等学校の男子については、尾道北高等学校の男子と同様に「9 家庭科で学んだ知識を実際の生活に生かしている」「11 家庭科で学んだ技術を実際の生活に生かしている」の2 項目の題材前の肯定率が低い値を示していた。題材後はそれぞれ、68.9%、66.0%と向上しているものの、7割に満たない結果となった。項目8,10で問うた知識や技術を身に付けているかについては、肯定率が8割を超えていることを考えると、知識や技術を身に付けているもののそれを実生活で活用できていないことが伺える。

女子については、ほとんどの項目で題材前から肯定率が80%を超えていた。題材後には、肯定率がわずかに上昇し、8 項目について有意差が見られた。

全体についてみると、肯定率の上昇に有意差がある項目が生活主体に必要な四つの要件すべてに見られたことから、学習者は生活主体として成長したと考えられる。しかし、いずれの学校も「16 自己の生活の中から課題を見いだしている」の肯定率が他の項目より低い結果であった。よりよい生活を目指し実践する生活主体としての成長を図るためには、まず、生活の課題に気付くことが必要である。今後も、身近な生活から課題を見だし、その解決を目指し、計画を立て実践する問題解決的な学習のより一層の充実が求められるといえる。

2 毎時の自己評価活動にみる効果

ここでは、各校が行った「リアルな課題」を組み込んだ学習内容が学習者の生活主体としての成長にどのように影響を及ぼしたかについて検証する。

まず、振り返りシート「今日の授業の記録」の自由記述を次の視点で分類した。この視点は生活主体に必要な要件の「よりよい生活を目指して実践できること」、家庭科の目標「主体的に生活を創造する能力」に必要な能力である。この視点が含まれる記述がみられることが、生活主体としての成長を示すと考えた。

なお、分析対象としたのは、生活主体アンケートの分析対象と同じ学習者のものである。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">○ 目指す生活像を実現していく方法を考えている。○ 自己の生活から課題を見いだしている。○ 実際の生活と結び付けて考えることができる。 |
|---|

「今日の授業の記録」における自由記述の分類の視点

概観すると、すべての学校において、毎時の自己評価活動の自由記述には生活主体としての成長を示す記述が見られた。また、これらの記述は、先述の指導の工夫を含む授業後に多く見られることから、「リアルな課題」を組み込んだ学習は、生活主体の育成に効果があったといえる。

次項から、各校の詳細について述べる。

(1) 三原東高等学校の題材「消費生活と環境」にみられる効果

生活主体としての成長を示す記述の件数とその割合及びその記述例を表15、表16に示す。

第1時の学習後の記述には「給料が思ったより少

なかったのがびっくりしました。これから生きていくためにもっと計画を立てていこうと思いました。」のように学習内容を将来の生活に結び付けて考えていたものが50%近く見られた。

また、第2時の国際経済を扱った授業後には「来年、台湾に行く（修学旅行）ので、円高、円安についてよく考えた。普通に聞くと内容は分からないけど結構身近にあり大切なことだと思いました。」という記述が多数見られた。普段は意識していないことが身近に感じられたと同時にこれまで分からなかったことが理解できた喜びとも読み取れる。

さらに、この学校の学習者の記述は、これからの生活に対する展望や今の生活の課題を解決する方法を考えているものなど前向きな記述が多く見られた。

表15 生活主体としての成長を示す記述の件数とその割合（三原東高等学校）

	目指す生活像を 実現していく方 法を考えている		自己の生活から 課題を見だし ている		実際の生活と結 びつけて考える ことができる	
	件	%	件	%	件	%
1 家庭の経済計画	41	48.2	5	5.9	13	15.3
2,3 家計と国民経済、国際経済	7	8.2	3	3.5	23	27.1
4,5 消費生活の現状と課題	10	11.8	0	0	11	12.9
6 消費者をめぐる問題	31	36.5	1	1.2	7	8.2
7 適切な意思決定	39	45.9	0	0	11	12.9
8 環境負荷の少ない生活	11	12.9	8	9.4	13	15.3

表16 生活主体としての成長を示す記述の例（三原東高等学校）

分類の視点	記述の例
目指す生活像を実現していく方法を考えている	・給料が思ったより少なかったのがびっくりしました。これから生きていくためにもっと計画を立てていこうと思いました。 ・これまでは月に一度来る給料は、多少は残ると思っていた。今回いろいろ生活費を求めているとほんの少ししか残らなかったため、将来一人暮らしになった時は、「覚悟しなきゃ」と思った。 ・クーリング・オフってどんな時でもできると思っていたけど、自宅とか業者の人が来た時以外はできないから注意しようと思う。 ・クーリング・オフについてやり方を学んだ。断り方を今後に生かしていけそうです。 ・多重債務って簡単に落ちてしまうものだとよく分かった。だから、安易に借金しないようにしようと思った。
自己の生活から課題を見いだして	・物が壊れてもすぐに捨てずに直してもう一度使いたいです。 ・私や家の人が詐欺にあわないように、家の

いる	中で話し合い、引っかからないようにしたいと思った。 ・自分が思っているより支出は多かった。収入と支出のバランスで、収入より支出を減らすように生活を見直しする。赤字を出さないよう家計簿をつける。 ・必要でないものはあまり買わないように気を付けようと思います。 ・自分自身ができることを見直して、家でやっていきたいと思う。
実際の生活と結び付けて考えることができる	・親がよく光熱費が上がったとか水道代が上がったと書いていたのは消費支出だったということが分かりました。 ・来年、台湾に行くので、円高、円安についてよく考えた。普通に聞くと内容は分からないけど結構身近にあり大切なことだと思いました。 ・今日は通販についてのDVDを見ました。自分もよく使うので、ちゃんと確認など、変なサイトで買い物はしないようにしようと思いました。 ・インターネットは、私たちにとって便利なものだけど、直接、店で買うわけではないから、ワンクリック詐欺などにかかってしまうかもしれない。信頼できるサイトでのみ購入したい。 ・自分の身近で起きそうなのは、キャッチセールスかなと思う。何も考えずにサインするのではなく必ず読み理解した上でしたい。 ・私は充電する線をいつもつけているから気を付けようと思う。 ・自分の家では階段の電気をつけっぱなしにしているので、直すように気を付けます。

(2) 尾道北高等学校の題材「子供と関わる」にみられる効果

生活主体としての成長を示す記述の件数とその割合及びその記述例を表17、表18に示す。

体験活動を取り入れた授業後には、「今回の体験で妊婦の大変さがよくわかった。これから道で妊婦さんを見掛けたらサポートしたい」「妊婦さん目線を体験すると、身近なところに危険がいっぱいあった」という目指す生活像を考えている記述や身近な生活から課題を見いだした記述が見られた。

また、新聞記事を用いた授業後には、「実際に起きた事件を新聞記事で読んで自分たちがしていかなければいけないことは地域の関係を保つことだと思う」のように学習内容を自分に引き寄せ考えている様子が見られた。

表17 生活主体としての成長を示す記述の件数とその割合
(尾道北高等学校)

	目指す生活像を 実現していく方 法を考えている		自己の生活から 課題を見だし ている		実際の生活と結 びつけて考える ことができる	
	件	%	件	%	件	%
1 生命の芽生えと出産	18	11.0	9	5.5	28	17.1
2 妊婦体験	59	36.0	3	1.8	17	10.4
3 子供の健やかな育ちを知ろう	22	13.4	2	1.2	11	6.7
4 赤ちゃん人形を抱く	22	13.4	7	4.3	15	9.1
5 子供の生活	68	41.5	8	4.9	15	9.1
6 子供の生活習慣	54	32.9	3	1.8	18	11.0
7 子育ての社会的支援	19	11.6	1	0.6	21	12.8
8 子供と遊び	6	3.7	0	0.0	18	11.0
9 絵本の読み聞かせ1	6	3.7	1	0.6	4	2.4
10 絵本の読み聞かせ2	21	12.8	2	1.2	7	4.3
11 子供の福祉を考えよう	58	35.4	1	0.6	14	8.5

表18 生活主体としての成長を示す記述の例(尾道北高等学校)

分類の視点	記述の例
目指す生活像を実現していく方法を考えている	- 自分が知らないうちに妊娠が進んでいたら喫煙や飲酒が悪影響を与えるので、自分は男子だけど気を付けたいと思った。 - 原始反射の様子を見て人間の仕組みは本当にすごいと思った。いところにまだ1歳になっていない子がいるので、これからもっと関わっていきたいと思った。 - 赤ちゃんは大人が守ってあげないといけなかったと思った。私もそうやって守られてきたので今度は私が守らないといけなかったと思った。 - 親が日常的にしている行動や言動が子供の価値観には影響してくるので、気を付けたいといけなかったと思った。 - 実際に起きた事件を新聞記事で読んで自分たちがしていかなければいけないことは地域の関係を保つことだと思った。
自己の生活から課題を見だしている	- 普段、喫煙者が周りにいるので、やめさせようと思った。 - 妊婦さん目線を体験すると、身近なところに危険がいっぱいあった。 - 赤ちゃんを扱う時は、自分の立場で考えてみて、何をして欲しいか考えることが大切だと思った。将来の夢は助産師だ。 - いこの赤ちゃんを抱っこしたことがあるが、首がしんどくなる抱き方だったなと気付けた。 - 自分の家にも小さなものや誤飲しやすいものがあるので、赤ちゃんが来た時などは気を付けたい。 - なんでも口に入れてしまうと聞いて、自分の家を想像してみると、あらためて危険が多いと思った。

実際の生活と結び付けて考えることができる	- CMなどで妊婦さんは喫煙や飲酒をしないでくださいといっていることの意味がわかった。 - 周りの人が支えてくれるのがどんなに心強いのか分かった。そして、母がとても苦労して私を生んでくれたことが分かった。 - 赤ちゃん人形を抱いてみて、実際より少し重いかと思った。頭が揺さぶられてしまうから大変だった。正月に会うのでやってみたい。 - 赤ちゃんの抱っこ一つでもすごく怖かったし緊張した。いところに赤ちゃんがいるので、お母さんの大変さがよく分かった。手伝ってあげたい。 - 親戚の子供が家に来た時に、物を片づけていたのをやり過ぎだと思っていたが、そうでもなかった。 - 私は将来、保育士として働きたいと思っている。少子化を解消できるように、認定こども園が普及していったらいいと思った。 - 感情をこめて読むのは難しかった。親は結構やってきていたのすごいいいと思った。 - 社会と子供や親などの関係はとても大切ということが分かった。近所にもっと目を向けられるようになりたい。 - 子供の虐待は自分とは関係のない話だと思ふのではなく、身近にも潜んでいるかもしれないと思う必要があることが分かった。怪しいなと思ったら保健所などに通報しようと思った。
----------------------	--

(3) 祇園北高等学校の題材「住まう」にみられる効果

生活主体としての成長を示す記述の件数とその割合及びその記述例を表19、表20に示す。

学習後の記述には「自分が将来こんな生活をするんだということが実感できた。」「自分とCさんを重ねて考えることができ真剣に考えることができました。」のように学習内容を将来の生活や現在の生活に結び付けて考えている様子が見られた。

また、「最近換気をあまりしていなかった。だからダニや結露などが多くなるのでこまめに変えたい。」のように自己の生活から課題を見だし、それを解決しようとする記述も見られた。

さらに、「実際の物件を選んだ。今までの勉強が結びついた。」というように題材の序盤から学習した知識や技能を題材末の「住まいを探してみよう」で活用するストーリー性をもたせた学習展開の効果を感じている記述も見られた。

表19 生活主体としての成長を示す記述の件数とその割合
(祇園北高等学校)

	目指す生活像を 実現していく方 法を考えている		自己の生活から 課題を見いだし ている		実際の生活と結 びつけて考える ことができる	
	件	%	件	%	件	%
1 住まいの役割	19	10.2	5	2.7	10	5.3
2,3 快適な住環境	29	15.5	21	11.2	40	21.4
4 部屋探しの基礎知識	27	14.4	2	1.1	11	5.9
5,6 住まいを探してみよう	23	12.3	2	1.1	7	3.7

表20 生活主体としての成長を示す記述の例(祇園北高等学校)

分類の視点	記述の例
目指す生活像を実現していく方法を考えている	・住まいを選ぶ時は自分の生活様式と合ったものを選びたい。 ・自分が将来一人暮らしをする時、どんな家に住みたいか考えながら授業を受けた。 ・大学進学について考える時などに、家の間取りや、周囲の利便性なども考えて選択ができればよいと思った。今の部屋の保健性をしっかり気を付けたい。 ・自分が将来こんな生活をするんだということが実感できたし、本当に自分に合った物件選びが必要だと感じた。 ・自分の譲れないポイントを見付けて本当に家を探す時に役立てるようにし、失敗しないようにしたい。
自己の生活から課題を見だしている	・私の家は日当たりが悪いなと思った。両親はどういう考えをしながら決めたのか知りたい。 ・私の家は動線があまり良くないなと思った。玄関を開けると脱衣所が少し見えるし、キッチンを通らないとリビングには行けない。 ・最近は換気をあまりしていなかった。ダニや結露などが多くなるのでこまめに換えたい。 ・自分が今住んでいる家は周りの家などで日光があまり入らないので、次はもっと考えて買いたい。 ・部屋を借りるのはもっと簡単だと思っていたが、いろいろと考えないといけないこともあるので大変だと感じた。 ・情報誌を見てもまだ分からないことが多いので知識を増やす必要がある。
実際の生活と結び付けて考えることができる	・引っ越しの時に親が収納スペースを気にしながら家を探していた。 ・自分の家と結び付けて考えながら学習できた。将来、部屋を借りる時によいことが学べた。活用していきたい。 ・斜めに欠けたように立っているビルがあるのは日照が関係していることが分かつ

	て、すごいと思った。 ・今の家でも防音とか気にしているから、一人暮らしをしても気を付けようと思った。 ・すごく集中して部屋を探せた。自分とCさんを重ねて考えることができ真剣に考えることができた。
--	--

3 授業者への聞き取りから考える「リアルな課題」と自己評価活動を組み込んだ題材構成について

ここでは、題材終了後に行った研究協力員会議で授業者が語った感想及び授業の手応えを綴ったものから「リアルな課題」と自己評価活動を組み込んだ題材構成について考えたい。3人の授業者の意見の概要を次に示す。

三原東高等学校 緒方教諭 これまでの授業でも、身近な事例を取り入れるよう心掛けてはいたが、教科書や学習ノート中心の知識重視型の学習展開となり、学習したことを実践しようとする態度を十分に育成できていなかったように思う。 今回の授業では、<u>身近な出来事をストーリー性をもたせて提示したり、事例学習やグループワークを取り入れたりしたことにより、事例を生活に結びつけた意見を交換することができ、学習が自分たちの生活に結び付いたと感</u>じられていたようである。 また、授業の最後に振り返りをして学習と自分の生活とを考えさせることによって、学んだことの実践場面、方法をイメージすることができていたようである。<u>振り返りシートに記入することにより、学習の内容と生活との結び付きについて整理できていた。</u>
尾道北高等学校 橋本教諭 保育分野は、本校生徒の現在の生活に、直接の関わりが少ない分野である。そのため、今回の授業では、<u>生徒自身が「将来の保育者」という意識で授業に臨むことが出来るように題材構成をすすめた。</u>これまでも授業の初めに、本時のねらいを端的に板書し確認していたが、今回の授業では、毎時、目標を2点具体的に生徒に提示した。その際、<u>「親として」または「保育者として」という文言を必ず入れるようにし、将来の自分を想定しながら、授業に臨めるようにした。</u> 本校の状況では、保育実習を組むことは難しい状況があり、授業では、乳幼児の映像等で補ってきた。乳幼児をかわいというだけの対象として捉えて終わったり、基礎的知識や技術の習得に留まったりする生徒も少なくないと感じている。将来の保育者として、また地域を担う者として、どのように乳幼児に関わっていきたいかという視点にはやや乏しいと感じていた。 今回の授業では、自分が「将来の保育者」であることを生徒に意識させることによって、昨年度までとは感想・気付き等の記述内容が違っているように感じられた。例えば、絵本の読み聞かせを体験する授業では、発表後に「読み聞かせ

によって、自分の子供にどのように育ってほしいか」を記述させた。これまでは「読み聞かせをしてどのように感じたか」という項目を設定しており、「優しい気持ちになった」「懐かしかった」などの感想にとどまっていた。今回は、「友だちを大切にすることが育ってほしい」「ルールを身に付けられるような本を読んであげたい」等の記述が見られた。また、複数の生徒が「自分が子供に読んであげたように、その子供が成長し、また子供（生徒にとっては孫）をもった時に読んであげてほしい」と記述した。保育者としての子供との関わりを意識する中で、世代をつなげていくことが考えられたのではないかと感じている。

祇園北高等学校 兼田教諭

登場人物の関連付けと、分散していたストーリーをつなげて話が分かりやすいようにした。またTRY（ワークシート内の課題）の問いを工夫することで、ストーリーを生かせるようにした。これまで、「住まい探しをしてみよう」発展課題として冬期休業中に実施していた。そのため、じっくり考えずに取り組んでいる生徒や分からないままに取り組んでいる生徒もいた。今回は、「住まい探しをしてみよう」を住生活の学習のまとめとして位置付け、学習した内容を振り返り、自分の将来の生活をイメージしながら考えるような題材構成の工夫を行った。

その結果、学習した内容を振り返らせ、理解が不十分だったところを明確にさせることができた。また、「ライフスタイルと住まい」「快適な住環境」について考えさせ、自らの住生活の自立のために必要なことについて思考を深めさせることができた。学習に際して、生徒は自分の将来のことを想像しながら、熱心に楽しみながら取り組むことができていた。

授業中に「住まい探しをしてみよう」を設定したことで、生徒の理解が不十分だった内容を教師自身も振り返ることができた。

授業者が語る「リアルな課題」を生かした題材構成の効果（下線は稿者による）

三原東高等学校の授業者は、「自分の生活から課題を見いだせないという学習者」に課題意識を感じていた。そこで、身近な出来事をストーリー性をもたせ提示したり、グループで事例検討を行ったりする題材構成の工夫を行った。その結果「学習が自分たちの生活に結び付いたと感じられていた」と授業者は評価している。また、自己評価活動については「振り返りシートに記入することにより、学習内容と生活との結び付きについて整理できていた。」と感じていた。これは、学習者の生活主体として成長をしていることを感じているものと推察される。

尾道北高等学校では、子供との関わり方や親になることへの不安という「リアルな課題」を学習者はもっていた。そこで、授業者は授業後の振り返り時に「将来の保育者」の視点を意識させたり、「砂場でけんかをする子供に、どのように言葉をかけるか。」

という場面設定を行った課題を与えたりすることで、子供と関わることを身近に感じさせようとした。題材後に授業者は、「保育者としての子供との関わりを意識する中で、世代をつなげていくことが考えられた」と評価している。

祇園北高等学校では、進学等に伴う一人暮らしへの憧れと不安という「リアルな課題」を学習者はもっていた。そこで、一人暮らしの住まいを探す疑似体験学習「住まい探しをしてみよう」を題材末に設定し、題材の初めからその課題の解決に必要な知識や技能の習得を目指す題材構成とした。これは、学習者にとっては、理解が不十分であった学習内容に気付く機会に、授業者にとっては定着が不十分であった内容に気付く機会となったようである。

研究協力校では、保育、住生活、消費・環境という扱う内容が異なる題材を展開した。すべての授業者が「リアルな課題」と自己評価活動を組み込んだ題材構成に意義を感じていたことから、家庭科の他の内容についても同様の題材構成が有効であることが推察される。

V 成果と課題

1 研究の成果

本研究では、学習者の「リアルな課題」を生かした学習内容と自己の生活と学習内容のつながりを考える自己評価活動を組み入れた題材を設計し、その題材構成が生活主体の育成に及ぼす教育的効果を検証した。その結果、次の成果が示唆された。

- 題材前後の生活主体アンケートの肯定的評価の割合は、3校ともすべての項目において増加した。また、上位3項目は、各学校の題材の内容と関連していることが分かった。
- 生活主体アンケートの題材前後の有意差検定を行った結果、生活主体に必要な四つの要件について有意差が見られた。このことから、学習者が生活主体として成長したと考えられる。
- 各校が行った「リアルな課題」を組み込んだ学習の特徴と自由記述の内容との関連を見た。目指す生活像を考えている記述や身近な生活から課題を見いだした記述、学習内容を自分に引き寄せ考えている様子が見られた。生徒の実態を反映した「リアルな課題」を組み込んだ学習は、生活主体の育成に効果があったといえる。
- 異なる題材を展開したすべての授業者が「リア

ルな課題」と自己評価活動を組み入れた題材構成に意義を感じていたことから、他の内容についても同様の題材構成が有効であることが推察される。

2 今後の課題

今後の課題は、次の2点である。

- 本研究では、各校ともに一つの題材における「リアルな課題」と自己評価活動を組み入れた題材構成が生活主体の育成に及ぼす教育的効果を検証するにとどまった。今後は、他の題材や年間の指導においても、同様の教育的効果が得られるか検討する必要がある。
- 本研究では、生活主体としての成長を学習者の自己評価による意識調査で検証した。今後は、学習者が題材末に備えておくべき力を明確し、その力を検証するパフォーマンス課題等による評価を取り入れる必要がある。

おわりに

今年度の研究を振り返り、次の2点が、本研究の価値として挙げられるのではないかと考える。

1点目は、学習者の実態を把握し、題材構成に組み入れる意義を「真正の評価」と関連付けて、整理し、その具体を示したという点である。学習者の「リアルな課題」を把握し、学習内容や学習方法を計画していくことの重要性は周知のことであるが、高等学校家庭科では、それがなおざりにされてきた感がある。今回、高等学校家庭科において、その意義を「真正の評価」と関連付けて整理し、内容の異なる複数の題材でその具体を示すことができたことは意義深いと考える。

2点目は、自己評価シート「生活主体アンケート」を開発したという点である。生活主体の育成には、自己を振り返る機会を継続的にもつことが必要である。この「生活主体アンケート」は、生活主体の育成に必要な要件を基に作成した自己評価シートであるため、どの題材においても使用でき、年度当初と年度末という長いスパンでの成長を検証することも可能である。今後の家庭科教育に関する実践研究において、汎用性があるものとする。

最後に、本研究を進めるに当たり、熱心に御指導いただいた広島大学大学院教育学研究科の鈴木明子先生に感謝申し上げます。また、本研究に御理解、御協力をいただいた三原東高等学校緒方陽子教諭、尾道北高等学校橋本明子教諭、祇園北高等学校兼田典

子教諭及び研究協力校の皆様に、心から御礼申し上げます。

【引用文献】

- 1) 中間美砂子(2004):『家庭科教育法―中・高等学校の授業づくり―』建帛社 p. 4
- 2) 天野正子(1996):『「生活者」とはだれか』中央公論者 p. 14
- 3) 荒井紀子(2005):『生活主体を育む』ドメス出版 p. 51
- 4) 福田公子(2008):『新版 教育実践力をつける家庭科教育法』大学教育出版 p. 10

【参考文献】

- 国立教育政策研究所(2002):『生きるための知識と技能OECD生徒の学習到達度調査』ぎょうせい
育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会(平成26年):『論点整理』
文部科学省(平成22年):『高等学校学習指導要領解説家庭編』開隆堂出版
中間美砂子(2004):『家庭科教育法―中・高等学校の授業づくり―』建帛社
日本家庭科教育学会(2004):『家庭科で育てる子どもたちの力―家庭生活についての全国調査から―』明治図書
中央教育審議会(平成20年):「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」
島本美幸・鈴木明子(2006):「高校生の生活自立能力と他者及び社会との関係性の実態」日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集 第49回日本家庭科教育学会大会
田中耕治(2005):「真正の評価」田中耕治編『よくわかる教育評価』ミネルヴァ書房 pp. 34-35
鶴田敦子(2012):「家庭科教育の立場から:リアルな課題を問う(特集 教科教育の目標・評価と指導の課題を探る)」『教育目標・評価学会紀要』第22号 pp. 9-16
吉原崇恵(2010):『生活を科学し、実践する力を育てる授業づくり 子どもがいきる家庭科』開隆堂出版
島本美幸(2006):『高等学校家庭科における自立能力育成に関する研究』
土屋善和(2014):「高校生の捉える『家庭科で身につく力』―他教科との比較から―」『学校教育学研究論集』第30号 pp. 115-130
國本洋美(2004):「家庭生活物語を利用した『里の小包式』授業―高等学校『家族・消費生活』」福田公子・山下智恵子・林美和子編著『生活実践と結ぶ家庭科教育の発展』大学教育出版 pp. 285-307
岸田蘭子(2011):「家庭科における学習指導」加地芳子・大塚眞理子編著『初等家庭科教育法―新しい家庭科の授業をつくる―』ミネルヴァ書房 pp. 29-44
内藤利枝子・伊藤葉子(2006):「家庭科の授業から見る自己評価の教育的効果」『千葉教育大学教育学部研究紀要』第54巻 pp. 127-133
岸田恵津・大瀬良知子・矢埜みどり・真鍋典子(2007):「振り返りを重視した高等学校栄養教育プログラムの実施と評価」『兵庫教育大学研究紀要』第31巻 pp. 117-126